

詠む広場

毎日歌壇

平塚市 門脇 明子
枇杷熟るる岬を巡る路線バス
横浜市 荒木 久子
朝顔市売物でなき一鉢も
奈良市 梅本 幸子
風を切る音のまぶしき夏つばめ
前橋市 木下美樹枝
紫陽花の陰に隠る猫のゐて
名古屋市 初夏みどり
北九州市 田中 裕子
バス停へ君と走った夏の雲
京都市 小林 香織
噴水や赤子の眠る乳母車
東京 山本こうし
バイクテントコッヘルスキトル夏の月
横須賀市 浅井 耕作
本堂に涼風通り半夏生
仙台市 川合 進
土浦市 今泉 準一
新茶汲む茶請けは京の塩昆布
東京 徳原 伸吉
ひと粒の雨に乱るる蟻の列
大阪市 吉田 昌之
真夜中や新樹の風の吹くばかり
岸和田市 板原 克介
目を清めたり紫陽花の花手水
浜松市 野畑 明子
長浜市 中島 正則
眼の高さから取り始む杏の実
北杜市 小松 俊隆
千体の仏の静寂花擬宝珠
加古川市 伏見 昌子
花石榴友の入院長びきぬ
茨城 杉山 満
妹の小さき顔やサンケラス
北名古屋市 月城 龍二

<歌集>

を哀惜する。八坂本小学校校舎の巨木と理和堂で酒を喰らいき唐十郎と(晶文社・3300円)
◇米川千嘉子『スナバコノキ』 2022年から25年までの作品を収録した第11歌集。歌集題は木の名前である。母の老い、夫の病に直面した日々をこまやかに詠む。へたつぷりと指を濡らして桃をむく身体性を母はうしなふ(角川書店・2970円)
◇千坂麻緒『はるるるるる』 第1歌集。歌のリズムがよく、そこにはほのかな寂りようが感じられる。へたつぷりと地面を駆ける鳩たちよいつまでも地を見てゐる我よ(典々堂・2420円)
(歌人・中川佐和子)

水原 紫苑 選

青嵐止まばピアノの質量に宇宙は潰れるたりはせぬか

△評▽宇宙に匹敵するピアノ、それは単なる楽器ではない。青嵐が必死で抑えているピアノの力。黒と白のキーは新しい言語である。

あからさまに顔をむけつつ人間の心に棲まふ天使と悪魔

△評▽小さな人間の心に同居する天使と悪魔、どちらが先に出て行くだろう。

生も死も曖昧になる短夜にわたしがわたしでない可能性

肺胞にひろがる森を剪定し吐息のひとつを真昼に棄てる

あどけない僕の理屈を追い越してハクセキレイの残滓あざやか

ガウディの夢見た空と今日の空みなでつくるサグラダ・ファミリア

骨の髄まで響いて空は暗くなる歩道橋から見上げる花火

クロールで水面の夕陽をかき集めあなたの二度とあらわれない夏

月光よ 十四のときの石膏の手形は記憶の離れ小島

居住まいの美しきひと青色の手帳をかざしバスを降りゆく
宇部市 常田 瑛子
前橋市 栗山ミユウ

米川千嘉子 選

平和博愛の祈りを奪われてへはやかわという名札をもらう

△評▽未来への祈りを込めて付けられた名前を知られることなく、姓だけが平仮名で。自分の存在自体が記号化されたよう。

真夜中も車途絶えぬ街道を赤子のような夫の手を引く

△評▽夫は外へ出てしまったのか、眠れないのか。高齢の夫婦の辛い長い夜がある。

赤海老の頭もぎとりチュッと吸うわが脳味噌もいくらか殖えむ

今よりも贅沢じゃないか娘らがお茶やお花を習った時代

誰ひとり寄せつけぬよう塗りたくるリップグロスに似ているめしべ

貴台という見知らぬ敬語使われてパチンコ遊技機になりたるごとし

人生を電車の中に見付けたり「無痛分娩」「小さい葬儀」

くちなしの匂いの一日過ぎゆきて麻酔のようなうづれが来る

別れたくないと何度も絞り出す言葉というより鳴き声だった

「わけあり」の品物お得でなきことを寡夫の自炊の三年で知る
東京 石川 真琴
福知山市 阪梨 義春

加藤 治郎 選

雲ならばお好きなときに好きなだけ「ラン」「ラン」「ラン」……と囁のとおりに！ 相模原市 内山 佑樹

△評▽雲は自在である。空を走る。ランという指令は断片化して風に舞っているようだ。結句は雲の魔法のような言葉である。

むかし見た「チロリン村とくるみの木」今どこにあるチロリン村は

△評▽NHKで昭和30年代に放送された人形劇である。75のリズムでよみがえった。

何か置き離れていった人がまた戻って予約していたとい

う ガードレールに手を滑らせながら歩くあなたが「海の匂い」と言う

手作りのクッキーみたいな朝焼けと繋がることのできな

い灯台

水からの反射光のみ浴びていて僕ははっと間違えてい

る まただれか真夜中に取りのこされてこの手からこぼれおちてゆくもの

人間のひと花ひと花と花の渋谷スクランブル交差点

改札機がピーピーピー喋る朝 通訳すれば「行ってらっしゃい」
狭山市 鈴音りんか
福岡市 藤田 美香

歌壇選者の伊藤一彦さんは都合によりお休みし、他の選者3人で選歌を行います。次回は14日に掲載します。

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan>・

haidan/)でも受け付けています。

詩歌便り

◇第81回現代俳句協会賞—鈴木牛後『節の色』(書肆アルス)、対馬康子『百人』(ふらんす堂)
◇第62回短歌研究賞—中根誠「墓碑銘」(28首、角川『短歌』2025年8月号)



こちらから投稿できます